



8
4342
1-5

川崎おんや序
天の石窓戸の常周演あま いそや とうしゅうげん私あひひこ思兼おしあきの跡あとれ
号ごう成なり敷しきささとと天あまれれああのの色いろのの一いち斑ばん大おほああららに
ああららてて以もつて来きた巧たくまくく又また依よ優ゆうををふふ事こと竹たけのの都みやこ
そそののににささひひこころろ生ま且かつ津つ澤さわははほほここにに精せいのの
新あらた劇げき作さくハハ月つき々々ふふめめううてて今いまれれ舞まい伎ぎのの
壯さう觀くわんややううのの心こころ々々のの台たい美みああせせららううららふふしし



昭和九年九月十四日
贈末

近きん来らい本ほん類るい格かく別べつ字じ無むおおかかははてて成なり物ものはは
心こころををささくく甚し迷ま惑わくのの折せ梅ばい香かうのの舞まい大だい切せつ
御ご境けいをを於お子このの内うち御ごのの日ひ救きうおお延のけけをを
見けん料りょうおお増ま中ちゆう法ぽうはは世よ辰しん分ぶんをを以もつて中ちゆう中ちゆう也なり也なり
一いち又また貸か河か金きん用よう又また字じ方かたのの以もつて格かくのの後あとにに
月つき捨すてらら下くだ底そこ有ありりかか辰しん換かん料りょうややああららじじ
中ちゆう屋おく仲なつ間ま

作からんやんぐられん林ん天ん帝ん款んよんとんよんぼん一ま掃りハか売り
井い戸と乃のろろぬぬととうう根ねのの國こ庭ていのの國こよよららか
ちちでで僧そう尼に神しん官くわん戲ぎ場ばよよああららざざれれをを眼まなこををままははす
道だう俗よく貴き賤せん戲ぎ場ばふふららととおおののぬぬももたたららう
神かみ心こころののおおははれれややののととをを盤ばん戸と出いれれままししははららぬぬし

文化三年春睦月

浪華 鉄格子





今田万次郎
 右市より松島
 之島 相の山の後

小島 中村の
 百了 坂東
 千子 叶
 林平 辰川八郎
 大原 修尾左衛門

身よびのとうらひまでい玉たまの名なをまゆくがむらひとつのもつた
其方その方の儀たれも竹波あいのうらら家老今田九郎左衛門が倅せうれの身みを拵こしら
てそむもちへ何事なニテトヤ青井下板うらとの刀やも入いたうま
ぢやカテ下カテ其刀そのの香ハ大大為アイヤ思思まふらうそ刀刀の香ハ
方方くとるひままかたれも相あ親親もまぬゆく大大神神々々とせ
いさうけし儀儀もようもけし儀儀もよよと其其儀儀々々
尖尖では形形でうら来来たカテ人人トテそれいざうらうとまのまま
ぢやまらうらうまら人人何何加加辰辰より武武將將家家老老上上る下下板板の刀刀
大切大切なる役役目目沖沖波波まきまらよ後後まらういそらやカテま
とるの孫孫をまらうむら梯梯でまらう竹竹ゆけふゆへへまらうカテ
ハハ貞貞まらぬぐ板板へお出出ななされておらうらうらうカテまらうカテむ
かひよとらうらう葉葉らうらうでいある貞貞のカテが利利のカテらうカテ

きいし追付おつ居居るてらうへ山田やまのの宿しゆくやてお待まちされ何何カ言い
そちふいとくとヤヤおと子こ細こがある山田やまのの宿しゆくとカテ集あれカテ
御用ごようもらうまらうい追付おつ居居らうまらうまませせいいおおさされれ
お出いててかかままらら方方儀儀私私ららいいせせうう林林集集れれ家家来来供供せせいい
なる程なる病病ははくくカカ下下ヤヤケケ恐おそううややららいいおおてて小こ罽せ及及よよ出出合あひひ
事事々々やカテ方方さん今今のカテいいおおままのカテ何何カカ下下アリアリヤヤお
もつ女おんな房ぼうのカテ兄あに成なりや倅せうれ皆みな居居てあの人ひとをカテ知しぬぬいい神かみ
戸と儀ぎ一いっ万まんとカテ支し配はいももるカテ夜よ浪なみ方かた儀ぎままららいいおおんんややいい
のカテ林はやし卒そつそれカテ儀ぎ後ごままららいいままららいいおおんんややいいおおんんややいい
おおややめめららぬぬとカテ者もの儀ぎままららいいおおんんややいいおおんんややいい
何なにとカテままららいいおおんんややいいおおんんややいいおおんんややいい
んんよよとカテららいいおおんんややいいおおんんややいいおおんんややいい

いひやくうらひやくまふひの**天**なる程はさぬ味り西
邦へ古市へ行く未よ**お**そんな方なふあまを
下さんせん**考**の待てあり未ぞく**カ**合点とやあ
いぬく**大**サア皆未やま〜
サア和くいふておまの
よの小てりみる
林サアヤ **中**表直取テ下坂の刀を
やる**カ**サア其刀ハ実をこれと茶やの入用金に
月へ山田の町へ羽織の合を〜
まをい出奔しては方々知れぬあそれでは
いふぞふ居るの〜**林**サアそれ
刀の〜**カ**サアそれ
もそれが〜
とへぞ刀と〜**林**サアそれ

思おまの〜
おまの〜
おまの〜
おまの〜
名名他の刀と〜
よ〜
おまの〜
おまの〜
名名免お〜
おまの〜
林林平



三保木古堂
 三保木古堂
 三保木古堂



万石亭下坂の物語
 とくろく

西ふしし一すお持下さりき入山六ふや人のことこの林平
つらもさやうでらり本山六何ぞ用でもあるう林平別後で
もろり本ぬぐ青井下坂の刀おりあとの義其刀いんよあ
主人がまをまうり糸つと求赤こちとる細るく人よよ
後う今其力とぬくやうてい主人の命よわたり来る何と
ぞ力かよまうへふ糸とさうてらり本やまいう山六ソリヤん安
ひるの指考のけ刀よ限ぬ徳他でさあれがよあ入用され
いどのふん出務もよあされ林平おや入下されてせん大考ま
まうあまうこの出務んうま山六イヤモ何すまきうていあひ
いんぬ林平おんぬそのカ一寸おと作付らまやせトと山六
たど市目おはは出務まされト刀とてととカテカテコリヤト
坂の刀でいあひついの入林平スリヤ是でいんり本ぬり山六

アコしく藤相伝くまき下坂の刀ふまひまひせうこお
紙がひ方よるッ是をさうまやれお紙林平
そあで化の皮が履き其折紙はけ方にふ持してさる
この目後山六下坂の折紙が二枚ありやうぬいひ
カテイヤく其折紙いをもろまよ持てあうが何と是で
もあらがうお折紙と懐より山六トレんせさうまやれあ
の折紙と係よすか遠りぬ二枚の折紙づれが履きい
ともハテより履きとおやチ林平さけ下坂の刀いつは
よりておまされてる山六三年のあまあへお折紙を
展るい林平までとらう細う上つこ高まよあお死
より詮義まきよい入る刀人よは後一たお折の月
月うお遠まこのい山六スリヤ高西のま配人の知つてえら

林平 知まてしもの **至珍** 南をいしあや ト海かきふるふ **山六**

やてうぬいひのやののまあつしは おぬいひ びびびのの
又十板うらやひりい大盗人め おぬいひ めめあやうのこ
くく ト折つてふとこ **至珍** かく おぬいひ 下さ

ませうとた出ま おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
束ら おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
大病人 おぬいひ 代は おぬいひ 借 おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を

さ おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
ふ おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
か おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
かく おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を

ふ おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
お おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
け おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
お おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を

お おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
け おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
お おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を
お おぬいひ くらあ おぬいひ ぐ佐助屋よりて刀を

舞^ま今^{いま}ち^ちを^をて^てあ^ある^る 五^ご珍^{しん}集^{しゅう} ト辰せうとぬぐ
トお座の拾

大^{だい}小^{しょう}と^と衣^い裳^{じょう} 小^{せう}衣^い ソ^そシ^し トあまを金と
ひらき格

用^{よう}さ^さら^ら何^{なに}付^{つけ}た^たら^らと 小^{せう}衣^い トあまを金と
ひらき格

先^{せん}一^{いつ}方^{ほう}行^{こう}付^{つけ}と 大^{だい}衣^い トあまを金と
ひらき格

相^{さう}孫^{そん}の^の合^{がっ}言^{ごん}情^{じょう}と^とら^らや^やつ^つは^は新^{しん}け^けを^をさ^さが^がか^かい

これ^{これ}よ^よれ^れも^もの^のあ^あれ^れ末^{まつ}ぬ 小^{せう}衣^い トあまを金と
ひらき格

あ^あい^い金^{きん}と^とや^やあ^あぶ^ぶと^とし^し度^どさ^される^{れる}刀^{たう} 大^{だい}衣^い トあまを金と
ひらき格

な^なら^らう^うと^とう^う 大^{だい}衣^い トあまを金と
ひらき格

い^いと^とあ^ある^る何^{なに}の^のや^やう^うと^とい^いも^もと^とあ^ある^る 小^{せう}衣^い トあまを金と
ひらき格

トあ^ある^る何^{なに}の^のや^やう^うと^とい^いも^もと^とあ^ある^る 小^{せう}衣^い トあまを金と
ひらき格

〇返

〇造^{ぞう}り^り物^{ぶつ}三^{さん}回^{かい}の^のら^らお^お体^{たい}上^{じやう}と^とい^いせ^せら^らし^し トあまを金と
ひらき格

代^{だい}官^{くわん}の^の形^{かたち}と^とい^いて^て トあまを金と
ひらき格

ト^とい^いて^て トあまを金と
ひらき格

い^いつ^つて^て トあまを金と
ひらき格

通^{つう}世^{せい} トあまを金と
ひらき格

多^た世^{せい} トあまを金と
ひらき格

百^{ひゃく}世^{せい} トあまを金と
ひらき格

千^{せん}世^{せい} トあまを金と
ひらき格

万^{まん}世^{せい} トあまを金と
ひらき格

そのなやせむに不礼のだんまの平は又下さるりなり **左様** 其
ひまの及ぬその徳をいへ **多他** 永の神領の一方の百
せうでらうまをるが紀加奴とまへし **多他** 紀加奴がらうま
まきけあとの庄役人の心あいつつて其まへに控置らうま
し **多他** アノ角を仰さぬつおさむまて紀加奴はひひ
のおさむま **多他** ソリヤ 何ぞぐけ角を仰つひひのま
そのらうまひやつ **左様** ハテそのいふをせらうまよひそ
や **多他** けあ偏は負まうてい私る **多他** 紀加奴
法郎や上本て金ま三百両出せあの方のあいつつてま
とらる由へその金とさし上本てらうまのま **多他** 紀
たが田地は角をいふまぬが掉と入つておつまやうま
直叙されて下されませと **多他** 紀加奴や **多他** 紀加奴の
り **多他** 紀加奴

あつて庄やとお整てらうまのせら合てらうまする
左様 守の角を仰さぬつおさむま **多他** 紀加奴
ま **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴
神のりおぬの大をさつひの下うらうま **多他** 紀加奴
にたつていと双方と改ア **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴
本 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴
左様 之テ 其まのまいと致して **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴
やのわりそやうでらうま **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴
の執持職諸因 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴
ら **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴
 多他 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴
 多他 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴
 多他 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴 **多他** 紀加奴



福岡首
万次郎七
あづり
かきふり

本巻藤原三平
頁 中山文七
さうと 芳次郎

つこのへ **左後** 貞こもく **三** ハツ ト さかん人三尺

さうきとを遊したる茶と汲らう **左後** ニテ ヤ付くお客く

結婚女房のようあまのちてらる **三** されいの後てらる未水との通う松板

お返し とこまうやうたるおまこお出もふくまぬけの本持く

まうあうよおまの別あまの紙面とに返

るのを後をましてまうくまうと別おあ人の遊う東海

及くおこうたされやうてらる未 **左後** スリヤ 東海及く

そ **三** ト けろ角を角目と **三** 別是う紙返 ト左

二番と やうこお水の上 **左後** アく ト角をく目く

角 アイヤ 友浪及くまの紙内くのおとま とま

拙者のおせん せん 白化たぐ合ま とま してま とま

ト下 **左後** まう とま 及く とま 及く とま 及く とま

角 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

コリヤ 柳甚方 とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま

コリヤ とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

首 とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

とま 及く とま 及く とま 及く とま 及く とま **左後**

中付る其の細これと云ふト 頁の折てまゝ状と出アせる頁
其の付 左様 サア 其のくまを押しせんとのこころいと
のぞかんともまゝの俵としてまゝ一丸印左様の鎌倉
下り伯父大守と押しあ人居のぬぐひをらうの親孫をま
とかまらうと表くまをせしと一家の系図をいといと首尾
よくいこさんと肉多ある 後定流くまをうけはるいサ
とのつゝ後の所右方の印の右の家の様と様とさかまとも
叙傳は一旦ゆゑに下坂の刀と貨物入へて不承なる
其刀の柄におおききとまうくまをいふとての家中の四
他門のちへに卒をうまうまうまうまうまうまうまうま
てられまべ方の印とやうい右の刀と後定流は出ま
志ごもおま味つゝまうまうまうまうまうまうまうま

とてかまをれといふは事まやうやい 三三三 抄とあま
なされ大守とゆゑに押せんとのあたのまゝいひし
ひいほにぬぐひも下坂の刀とたづひ出へて万承印と
海軍のまをせまへぬとまをいひぬまをま 左様 はん
まう 鎌倉表の首尾あひまをうまうまうまうまうま
豊文のまの一大守かまらぬ他とてまを 三三三 抄
小化と云致しませぬと 左様 万承印まを 万承印 三三三
林平付出の 左様 万承印まをまうまの福園真とてまの
定承其方より不承のまの刀のまをま首尾たのまを
まう 海軍表とまうまを致せ 三三三 抄 三三三 抄
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
刀の竹巻のおおきうなまをま 三三三 抄 サア 三三三 抄

家来の斗らひて山田の町人の新けたがそと者を出して
行方が急ぎぬゆゑお席はうりけ方にあつたの

其お席へお座りて
林平とせんのお席を恐れたも

林平 子トさうさ二枚貰はせよ
コリヤ二枚ある筈とヤト

コリヤ二枚ある筈とヤト
コリヤ二枚の折紙

コリヤ二枚ある筈とヤト
ヤアコリヤ二枚おぐら賃物どやりの

なぐら賃物どやりの
なぐら賃物どやりの

二枚あるのてらう有りぞ
林平 これバのうてらう本下板

の刀詮合せやとおれ
おれと申すは詮とらう

の刀と穿人老は
穿人老はと申すは

申すはと申すは
申すはと申すは

申すはと申すは
申すはと申すは

めお席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて

お席をおて
お席をおて



福岡貢
 壺中
 翁の
 号

大塚相の谷持
 中山丈六
 大尾海尾

貞乃はらうたもつしつあふ

モウ 七らまおのらけぬ内けたいおやぶ ト本手よりの

方下 存んよコレ貞今よふ思ふてんもバアアの大巻や大巻

とつあめつつ刀を使およふとつとあふやあつ 殺出も

せぬのわつてんがゆぬついのハ ハテ本もおつせんき

殺しおんおふまきしまふれまするよ トは内大巻状の中あふを

大巻 コリヤ たふらぬハ ト一さんよは徳痛 ハハをりたりの 大巻トやたのいら

とんとまきまふひのまきや 方下 コレ今のやつらう大巻と

つふ刀を使ふよあふとつらつやりのハ とんたうら

今のつ トき内向より林平をりの出 とつとよはあふとつ方下と面各 林平 方下存

さぬ方下 林平おやまのつ 林平 今まふ大巻のあふ

ませまんだつ 方下 たつて今けらとと 林平 刀のあ

がくのけつ通 ト方下よは状と かけりうやと 方下 さらして換ふハ

林平 まいりてあふアがまいとのまふ大巻め ト一さんよは

何のまきやまきとまきまきまき 方下

け林よんでんまひのハ 大巻 披れとりのつやまきまき

そふ他よて下板の刀よふハ 早速 届はてあハ 殺

おらまて宛あまされと 殺 殺のまきとつよいのつよ

つ トは内大巻よりきり出 大巻 方下存らぬと ト方下

と 方下 方下存らぬと切けるうぬよハ せん ざがあ

つ トは内大巻よりきり出 大巻 方下存らぬと ト方下

は トは内大巻よりきり出 大巻 方下存らぬと ト方下

は トは内大巻よりきり出 大巻 方下存らぬと ト方下

は トは内大巻よりきり出 大巻 方下存らぬと ト方下

は トは内大巻よりきり出 大巻 方下存らぬと ト方下

は トは内大巻よりきり出 大巻 方下存らぬと ト方下

は トは内大巻よりきり出 大巻 方下存らぬと ト方下

おてある女と引 **三** スリヤけ杖が宛名の所 **林平** いくらも **頁**

万は帯とぬそのてちんを **カ** 三 合兵とや ト 藤あしん

てちんを切落すと大巻 **三** 三 一万ついでるあふいぞ

切うらるれもらづりのて **三** ト 大巻の杖をさしとる **林平** の杖は

合あや入と **三** 合兵とや ト 大巻の杖をさしとる **林平** の杖は

林平 合兵とや ト 大巻の杖をさしとる **林平** の杖は

三 万は帯とぬお出らぬや **三** 藤あしん

おておけ杖のあて **三** 藤あしん

そめるおとや **三** ト 杖をさしとる **大巻**

杖のむうのむう **三** 藤あしん

四の出 **三** ト 大巻の杖をさしとる **林平** の杖は

杖頂が又 **三** ト 大巻の杖をさしとる **林平** の杖は

繪本川崎音頭臺巻終



